

可能動詞のこと

揺れ動く日本語

「食べれる？」

走れる 食べれる 読める 見れる 切れる 笑える 着れる
書ける 上げれる 遊べれる 借りれる 投げれる 打てれる

上の中で、日本語として正しいのはどれでしょう。

すぐに頭に浮かんでくる人もいるでしょうし、なんだかおかしいなと思いながらもはっきりと判別できない人もいるのではないのでしょうか。中には、何ら違和感をもたない人もいるかもしれません。

パソコンを使っていると、一太郎では「食べれる」と打てば《ら抜き表現》という注意が表示されます。(ワードでは、そのまま変換されるようです。)

一時期、この《ら抜き表現》が、現代日本語の乱れの象徴のように指摘されたことがあります。ところが、指摘している人たち自身も《ら抜き表現》を日常的に使っていることが多く、最近では、《ら抜き表現》が市民権をもちはじめたようです。同様のことは、「全然大丈夫。」という「全然」の使い方にも当てはまります。(本来は、「全然大丈夫。」という使い方がなされていたようですが。)

言葉は揺れ動き、変化していくものです。子どもたちに、どこまで厳密に教え、伝えていくべきか、曖昧な状態になっているのが、現状でしょう。《ら抜き表現》をうるさく言うと、「読める」と言う子も出てきます。子どもなりに考えての表現です。

ということは、日本語の可能表現は、かなり難しいといえます。それをわかりやすくするために、3つの意味が含まれている「食べられる」という表現を、ほかと区別して、可能表現であることを浮き立たせるように、《ら抜き表現》が一般的に使われはじめたということでしょう。とすれば、これは、日本語の乱れというよりも、新しい表現への必然的な移行ということになるのかもしれない。

ただし、知らなくてもいいということにはなりません。

料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭にびんの中の香水をよくふりかけてください。

「注文の多い料理店」より

《ら抜き表現》だけが可能をあらわすということにしてしまうと、この部分の読みは成立

しなくなります。「食べられます」が表現する意味の多重性が、おもしろくしているのです。しかし、子どもたちの中には、「食べられます」を「食べれます」としかとらえられない子もけっこういるものです。もちろん、その後を読んでから、もう一度ここに戻ってくると、多くの子は理解できるのですが。

ちなみに、この「食べられます」の意味がつかめない子は、次の「おなかに」もとらえられません。言葉遊び的でおもしろい表現なのですが、言語への意識・感性が弱いと、そのまま読みとばしてしまうようです。

いや、わざわざご苦労です。大変結構にできました。さあさあ、おなかにお入りください。

《ら抜き》にする動詞、しない動詞

もともと、可能動詞と受け身動詞の形式は同じでした。それが、まず、五段活用の動詞が、受け身動詞とはちがう形式をもつようになりました。「読まれる」→「読める」そして今、それ以外の動詞(一段活用の動詞や力変動詞)も、《ら抜き表現》で、受け身動詞とはちがう形を取り始めたのです。小学生に《ら抜き》ではない「正しい」形を教える時、「五段活用の動詞は・・・」などとは言えません。そこで、命令する形が「～しろ」という形になる動詞は「しろ」の「ろ」のところを「られる」におきかえてつくること(「食べろ」→「食べられる」)、それ以外のほとんどは、命令する形に「る」をつければいい(「走れ」→「走れる」と教えるといいでしょう。「切れる」は正しいけれど、「着れる」は《ら抜き》になることを、それぞれの命令の形を出して考えると、端的にわかります。

*《ら抜き表現》が広がったのは、方言が発信元になっているかもしれないと思われまます。「着る」の命令形は「着ろ」ですが、地方によっては「着れ」とも言うし、岡山県内では、「きい」とも言います。こうなると、「着れる」というのは違和感のない形になります。高学年なら、こういうことも、言葉の勉強のおもしろい題材になるかもしれません。

大統領

ワニ

食べられる

上の単語に、くっつき(助詞)をつけて、3通り以上の意味の文をつくらせてみましょう。たくさんの方ができ、それぞれを映像化するとおもしろいものです。その中で、子どもたちは、「食べられる」が受け身・可能・尊敬をあらわすことに気がつくでしょう。その中の、可能だけが《ら抜き表現》が使えることがわかります。

可能動詞の形

ところで、可能動詞は「食べられる」という形だけではありません。「食べることができる」「食べうる」という形もあります。「食べられる」は、どちらかというとはなしことば（会話）でよく使われ、「食べることができる」は、文章の中（説明文や物語の地の文など）でよく使われます。また、「食べうる」は、特殊ないいまわしの中で使われます。

可能動詞が意味することは

それでは、可能動詞は、どういう意味をもっているのでしょうか。単純に、英語の「can」におきかえることができるものばかりではないようです。大きくわけて、三つの意味があります。

1. 可能性をあらわすばあい

可能動詞ですから、基本的には、可能性をあらわします。ただ、可能性というのは、内に秘めたものです。そのため、ここにあらわされる可能性は、能力や特性をあらわすことになります。

ア) かれは、50メートルを8秒で走れる。

イ) 父は、どんなむずかしい字でも読むことができる。

ウ) この水は飲める。

エ) 昔、この川ではアユがよく釣れた。

オ) 芝生の中では遊ぶことができません。

ア、イは、「かれ」「父」の能力としての可能性をあらわしています。アの場合は、「かれは50メートルを8秒で走る。」という文に近くなります。

また、ウ、エは、そのものや場所の特性としての可能性をあらわしています。「わたしは、この水が飲める。」という文になると、水の特性にはなりません。「この水は飲める」の「飲む」は、だれの行為であるかは問題ではありません。「飲む」対象である「この水」の性質を述べているのです。

オは、遊ぶことができるかできないかという可能性の側面よりも、芝生の中で遊んでもいいのかどうかという側面が強くなります。つまり、許可をあらわしているのです。

2. 運動の実現をあらわすばあい

カ) 震けた人は、出してもよろしい。

キ) 初めて、50メートルを8秒で走れた。

ク) ボタンがとれた。

ケ) ほどけないように、しっかりとロープを結んだ。

カ、キは、期待したこと、意図したことの實現をあらわしています。カのばあい、英語に訳すとすれば、どうなるでしょう。可能というよりも、完了に近い意味になるのではないのでしょうか。

ク、ケは、期待や意図とは無関係な自然な實現をあらわしています。このばあいは、「～することができる」という形にかえることができません。クを「ボタンがとることができた。」にすると、とれなかったボタンをけんめいにとるすがたが事前にあることになり、カ、キの例と同じになります。

3. 自発をあらわすばあい

ク、ケの例で、人間の心の動きをあらわすばあいは、自然に感情が生ずることをあらわします。

コ) 話を聞いていて、泣けてきたよ。

サ) なんだか自分がまちがっているように思えてきた。

これも、意図とは関係のない動きですから、「～することができる」にかえることはできません。「話を聞いていて、泣くことができてきたよ」にすると、まったくちがう意味になり、できごととしてもちがってきます。

この用法には、「しのばれる」「思われる」のような、古いタイプの可能動詞が使われます。

時間との関係

以上が、可能動詞があらわす三つのなかみですが、時間との関係からみると、大きく二つに分けられます。

1. は、能力や特性という性質に似た側面をあらわしますから、どちらかという説明に近いものになります。つまり、いつのことかという時間は問題ではありません。

いっぽう、2. 3は、何らかの動きが實現したことをあらわしますから、具体的な時間帯が問題となります。つまり、できごととして起きていることになります。

読みの中で、以上のことを念頭におくと、読みがちがってくるかもしれません。説明文では、1の用法が多く使われ、あるものの特性を説明している文が多くあることでしょう。物語の中では、両方が入り交じって使われているでしょう。そうすると、できごとなのか説明なのか、読み分けてみるのが大切になるかもしれません。

「きれいな文法」、読みの中でちょっと意識してみませんか。